

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 牧野元紀

本論文は、18世紀後半から19世紀半ばにかけての、パリ外国宣教会（MEP）西トンキン代牧区を中心とする、ベトナム北部におけるキリスト教コミュニティの形成と変容を、社会史的に考察したものである。

本論文は三部から構成されている。第Ⅰ部「パリ外国宣教会とベトナム北部宣教」では、MEPの世界全体での布教活動におけるベトナム北部宣教の位置が検討されている。第1章「18世紀以前のパリ外国宣教会とベトナム北部宣教」では、ベトナム布教で先行していたイエズス会が、典礼論争に敗れて衰微する18世紀半ば以降、MEPがベトナム北部においてイエズス会の勢力を吸収しつつ本格的に地歩を築くようになったこと、その活動にはナムディンとゲアンという二つの中心があり、黎朝鄭氏政権の下で前者が頻繁に弾圧に見舞われたのに対して、後者ではキリスト教に理解を示す高官による保護があったことが指摘されている。第2章「19世紀前半のパリ外国宣教会とフランスの宣教支援団体」では、MEPがフランス革命後の反教権主義運動による打撃を受けたものの、ナショナリズムとの一体化によって勢力を回復し、教皇から極東での勢力拡大をはかる宣教団としての正統性を獲得する一方、民間の宣教支援団体から莫大な金銭的支援を獲得したことが指摘されている。第3章「ベトナム宣教事業をめぐるパリ外国宣教師の心性」では、MEPがベトナムでの宣教にかけた精神的背景が考察され、かつて徹底した弾圧のため宣教事業が潰えた日本に対するトラウマが宣教師には存在し、ベトナムは「第二の日本」と位置づけられ、ベトナム政権による弾圧の強化は、むしろ宣教師達の「殉教精神」をかきたてることになったことが指摘されている。

第Ⅱ部「パリ外国宣教会のベトナム北部における布教活動の実態」では、MEPが組織したベトナム北部のキリスト教コミュニティのあり方が、非キリスト教徒社会との断絶よりは連続性に力点を置いて論じられている。まず第4章「神の家の組織」では、代牧区における信仰生活共同体の中核組織である「神の家」について、それが共有財産制による安定的な経済基盤を有し、その構成員の中から聖職志望者を選抜し必要な教育をほどこすという機能とともに、貧者・病人・孤児などを信者・非信者の区別なく救済するという、開放的性格もあわせもっていたことが明らかにされている。第5章「カテキスタの活動」では、現地人聖職者組織の末端に位置し、上級聖職者と一般信者を結ぶ役割を果たしたカテキスタについて、上位のカテキスタは漢字・漢文に秀でた文人という性格をもっており、信者・非信者を問わず村落知識人として敬意を集める存在で

あったことなどが解明されている。第6章「布教に用いられた書記言語」では、19世紀の半ばまでに時期においては、布教活動の書記言語として主に用いられていたのは、アルファベット化されたベトナム語（クオックグー）ではなく、漢字・チュノムであり、言語文化という面でキリスト教コミュニティと非キリスト教コミュニティとの間に際立った相違はなかったことが指摘されている。第7章「一般信者のくらし」では、代牧区に散在する最小の集住単位であるクレティアンテのあり方、そこをたばね信者たちを代表して非信者や地方官人との折衝にあたった「チュム」の存在などを検討し、信者の大半は農民であったが、漁民・兵士・医師など移動性の高い職層にも信者は多く、こうした移動者のネットワークや女性が、弾圧への抵抗では重要な役割を果たしたことが指摘されている。

第Ⅲ部「ベトナム北部における現地政権とキリスト教コミュニティとの関係」では、18世紀末から19世紀前半にかけての現地政権とキリスト教コミュニティとの関係を、ナムディンとゲアンの地方官と教会勢力の関係に注目して検討している。第8章「西山朝下の西トンキン代牧区」では、従来キリスト教にとっては暗黒時代として描かれることが多い西山朝期が、むしろその後のベトナム北部におけるキリスト教コミュニティ発展の基礎が形成された時代であったこと、この時期にもゲアンではキリスト教への対応が地方高官の意思で大きく左右される構造が存在していたことが指摘されている。第9章「阮朝明命期のナムディンとゲアン」では、未曾有のキリスト教大弾圧が行われた明命期にも、ナムディンでは徹底した弾圧が行われたのに対して、ゲアンではキリスト教に理解をもつ高官が頂点に立つ現地官界とキリスト教コミュニティが協力して社会秩序の維持を図り、明命弾圧を無傷で乗り切ったことが明らかにされている。第10章「阮朝紹治下、南トンキン代牧区の成立」では、紹治期がMEPにとって宣教再開の好機となり、その際ゲアンの果たした役割は大きく、そのことが1847年の南トンキン代牧区の成立にたつなことが明らかにされている。

本論文の意義は、まず第一に、1990年代後半から公開が進んだフランスのパリ外国宣教会文書館の所蔵文書を駆使し、それとベトナム側の資料をつきあわせて、18世紀後半から19世紀半ばにかけてのMEPの西トンキン代牧区のあり方をきわめて実証的に描いた点にあり、従来きわめて政治的に扱われることが多かったベトナムのキリスト教史研究に新しい地平を開く研究となっている点にある。第二に、こうした実証研究を通じて、従来は対立と断絶という側面ばかりが注目されていた、キリスト教コミュニティと非キリスト教コミュニティに、むしろ社会的・文化的に連続していた面があったことを解明したことである。この時期の西トンキン代牧区における宣教活動の書記言語として漢字・チュノムが大きな役割を果たしていたことなど、ベトナム史の書き換えにもつ

ながら重要な指摘がなされている。第三に、西トンキン代牧区の中心地であったナムディンとゲアンでは、地方官人とキリスト教コミュニティの関係に顕著な相違があり、明命弾圧を無傷で乗り越えたゲアンが教勢を拡大し南トンキン代牧区として自立していく過程が明らかにされ、キリスト教史研究における地方の重要性が説得的に提示されている。また第四に、MEPをはじめカトリックの動きを、東アジア全体を視野に入れて検討することにより、カトリック布教における日本とベトナムの関係性が浮き彫りにされている。

なお審査では、当時の MEP 内で情報がどのように伝わっていたのかという通信システムの検討がなされていないこと、ゲアンの特異性はよく描けているが、なぜゲアンが特異だったのかの分析がやや物足りないこと、女性の役割について新しい事実を掘り起こしているが、それがキリスト教の影響の結果なのか否かなど、もう一步深みのある分析が望まれること、「神の家」の内と外、キリスト教と非キリスト教コミュニティの基層社会レベルでの「共生」関係を示すような非キリスト教徒の側の資料が提示されておらず、「共生」関係が十分解明されているとは言いがたいこと、「現地政権」といった言葉づかいに宣教会側の資料に引きずられた面があることなど、本論文のいくつかの弱点も指摘された。しかし、これらの問題点は、本論文の博士学位論文としての価値を否定するような性格のものではなく、今後の研究で克服すべき課題であると、審査委員会は考える。したがって、本審査委員会は全員的一致で本論文は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。